含蓄と風刺に富んだ好著

興味深いアルゼンチン社会批判

伊高浩昭

ホルヘ・ブカイ／マルコス・アギニス著

御者

人生の知恵をめぐるライブ対話

46判・296頁・2940円
新曜社
978-4-7885-1161-3

機智、ユーモア、警句に充ち満ちた類い希なる好著だ。著者は二人のアルゼンチンの知識人だが、正確には、二人がアルゼンチンの五都市とウルグアイのプンタデルエステ市の計六都市で世紀末の二〇〇〇年ごろ連続的に開いた対話・討論会に参加し発言した百数十人の市民も共著者である。両著者は「皆と一緒に作り上げる本」と明言しているが、その試みは成功している。

対話・討論会のテーマの中心は「愛」。両著者と市民は「人に人間性を与えるのは知性、知恵、知識でなく、愛だ」という認識も踏まえて、恋、性、不貞、別居、離婚などを縦横に語りで世紀末の二〇〇〇年ごろ合う。「結婚生活だけが失敗に終わるのではなく、時には離婚生活も失敗する」とか、「メキシコでは、女性は男性が変わってくれると信じて結婚し、男性は、女性は決して変わらないと信じて結婚する。どちらも間違いだ」など、軽妙な言い回しが続く。

だが筆者（伊高）にとって一層興味深いのは、アルゼンチン人やその社会に対する批判の言葉だ。「アルゼンチン人は、不平を通して自分をインテリに見せる習慣が身についている」、「アルゼンチンは一時、軍政の圧政で昏睡状態に陥った」、「アルゼンチン人はある時期から方向を見失い、虚栄心と尊大さに溺れ、せっかくの資源を無駄にし、自分たちが世界の中心だと感じるに至った」と、含蓄がある。これが異邦人の言葉なら、自国や自国民のことを棚に上げてということになるが、当のアルゼンチン人が指摘するのだから安心して納得できるのだ。

「アルゼンチン人は何の根拠もなく悲観主義が美徳だと思い込んでいて、人に悲観主義者か楽観主義者かと訊ね、相手が楽観主義者だと答えようものなら、間抜けな奴だと非難する。私はそのような事態を避けるため〈楽観主義者ではなく希望をもっているだけ〉と答えるようにしている」、「アルゼンチン社会は非常に抗議が多く、不満だらけで、市民は抗議するのに慣れきっている。抗議は責任を負いたくない者の表現法だが、提案は創造性や責任とともに危険を伴う。抗議から提案へと向上するのは容易ではない」――立派な文明批判だが、この「抗議」の部分は日本人にも当てはまるだろう。「暴力は常に不寛容として現れる。人間の無能の最も具体的な表現だ」という暴力論も鋭い。

少し小言を言えば、「〈ソ連国家元首〉クルシェフ」とあるのは「〈ソ連共産党第一書記兼首相だった〉フルシチョフ」とすべきだし、「リーベル・プレート」は「リバープレート（ラ・プラタ河）」だ。英国の経済と外交政策の強い影響下にあった時代に入ってきたサッカーの、このチーム名はアルゼンチンでも英語読みなのだ。また、発言者の紹介部分に出てくる「社会の通信員」は意味不明だし、「除虫菊を食らわす」という表現の訳註には、この言葉がどのような場合にどのような意味で使われるのかの説明がない。二刷りで修正してほしい。

この本のもう一つの魅力は、風刺に富むチステ（一口話）が随所にちりばめられていること。日本社会の物足りなさはこの種のチステが日常生活にほとんどないことだ。私たちは、もっと政治や社会に対して不平不満を言い、たとえ対案を出せなくても、せめて風刺の効いた一口話で鬱憤を晴らすべきなのだ。この点では、アルゼンチン人に学ぶべきだろう。（八重樫克彦・八重樫由貴子訳）（いだか・ひろあき氏＝ジャーナリスト）

★ホルヘ・ブカイはアルゼンチンの医師（精神病理学）・心理療法劇作家。ゲシュタルト療法を基にした独自のセラピーを展開。一九四九年生。

★マルコス・アギニスはアルゼンチンの作家・神経外科医・精神分析家。「逆さの十字架」でラテンアメリカ初のスペイン・プラネッタ賞を受賞。一九三五年生。